谷崎全集逸文一点と谷崎関連資料四点紹介

細江　光

谷崎全集の逸文及び谷崎関連の資料若干を発見入手したので、ここに紹介しておく。

一、小野賢一郎著『新聞記者の手帳　第一集』序

これは、かつて「谷崎潤一郎全集逸文紹介2」（「甲南女子大学研究紀要」平成三年三月）で探索中の逸文として挙げて置いたものであるが、近年、国会図書館に入ったようで、ようやく見ることを得た。

『新聞記者の手帳　第一集』は、大正三年六月十八日印刷、二十一日発行で、神田三崎町にあった旅館「玉名館」の女将で「青鞜」社員でもあった荒木郁子が始めた美人大学社が、手始めに出版したものである。郁子が六月九日夜付けで跋文を書いている。

「玉名館」は、郁子の父が出身地・熊本県玉名郡（現・荒尾市）に因んで付けた名で、九州出身者（中でも有名なのは宮崎民蔵・滔天兄弟）がよく宿泊していたと言う。小野賢一郎は福岡出身なので、その関係もあったのかも知れない。

本書に収められているのは、上方旅行見聞記などで、第二集以下も出すつもりだったらしく、巻末の近刊広告に、《この集は小野賢一郎氏の作物を以て満すもので全集約十冊になります。》として『新聞記者の手帳　第二集』の内容が紹介されている。ただし、これは出た形跡がない。

谷崎と小野賢一郎との交友の始まりは、前にも書いたことが

あるが、小野の著書『明治・大正・昭和』（昭和四年四月・萬里閣書房）「明治篇」「『溝』の創作」の項に、《谷崎潤一郎氏と交際の始つたのは（中略）谷崎氏の三田文学の小説が発売禁止になつたので、私が向島の笹沼別荘に訪問したのが、その皮切りで（中略）二人でよく遊びもし、飲みもし、食つても歩いた。》とある事から、「三田文学」の『颱風』が発禁になった直後、明治四十四年十月十一日「東京日日新聞」に、「文壇の彗星谷崎潤一郎」として掲載されている谷崎の談話を取りに行った時、と推定できる。

左に紹介する序文中に《初対面の明くる日の新聞紙上に、いつの間にか訪問の記事》が出ていたというのは、この事に違いない。

谷崎のこの序文は、若々しい所、ユーモアがある所と、相手の人物を見抜く眼が確かである所が興味深いと私は思う。

なお、谷崎が序文の中で言及している《ニコポン》《ビリケン》という綽名については、小野賢一郎自身も『明治・大正・昭和』「大正篇」「ビリケン閣下」で、自分が名付けたと認めている。「ビリケン閣下」によると、《ニコポン》は、小野が「桂大明神」という連載読み物の中で、桂太郎が政治家・実業家を懐柔するのに、ニコニコしながら相手の背中をポンとたたいて手懐けてしまうことを言ったものである。《ビリケン》（Billiken）は、アメリカで作られた福の神となる人形であるが、小野は、たまたま輸入され始めたばかりのビリケン人形を銀座で見掛けた直後に、新橋駅に到着した寺内正毅を取材に行って、そのてっぺんが尖った禿頭の形からビリケンという綽名を思い付いたと言う。

また、谷崎が序文の中で言う小野が《いろ〳〵複雑な、苦しい境遇などにも打ち克つて来》たこととは、『明治・大正・昭和』「明治篇」に出る、小野が十五歳の時から小学校教員、次いで新聞記者となって働き、妻子を相次いで肺病で失ったこと、などを指すと考えられる。

なお、原文は旧漢字・総ルビであるが、翻刻に当たって、新漢字に改め、ルビは一部だけ残すことにした。

＊　＊　＊

最初小野君に会つたのは今から三年前であつた。私は苟くも新聞記者と云ふものゝ訪問を受けたのは其れが始めてゞ、其の時の小野君は小野君自身及び新聞記者としての第一印象を私に与へた。一概に新聞記者と云ふ者を薄気味悪く思つて居た私は、

小野君の案外にも鷹揚な、悠々たる態度言語に感心した。さうして初対面の明くる日の新聞紙上に、いつの間にか訪問の記事が礼々しく、而も仰山な文章で吹聴されて居るのを見た時、今度は少からず吃驚して聊か腹も立つた。勿論自分を褒めてくれたのだから、抗義を申し込むつもりはなかつたが、その辺に如才のない小野君は、此方の抗義を待つ迄もなく其の日のうちに慇懃な詫び状を送つて来た。成る程抜け目のないものだと私は又感心した。其の代り前の感心の方をそッと割引して了つた。

小野君の容貌は所謂童顔で、円いと云ふよりに寧ろ隋円形と云ひたいくらゐに丸々として居る。此れは鋏で切つたやうに細長い眼と口の線が、余計その感じを起させるのであらうと思ふ。しかく容貌の柔和なのに似合はず、体格は頑丈で魁偉で一時体量が二十二三貫目もあつたと云ふ。「威あつて猛からず。」と云ふよりも、寧ろ「肉あつて猛からず。」と云ふ方が適当であらう。

抜け目のない挙動や鷹揚な態度から推量して、童顔のわりには年喰ひであらうと思つて居た私は、小野君が自分よりも年下――而も二つ三つ年下であると聞いて、実際びつくりして居る。実世間的の物事に就いては、彼は私よりも遙かに豊富なる経験に富み、いろ／＼複雑な、苦しい境遇などにも打ち克つて来て、可なり鍛錬された常識を持つて居るらしい。

故桂公にニコポンの綽名を附けたのも、寺内伯をビリケンに比喩したのも、もとはと云へば小野君であると聞いて居る。兎に角小野君が一種の機智を持つて居る事は争はれない。

体格の巨大な為めか、小野君の精力は絶倫である。過度の飲酒、漁色、勤労に従つて少しも困憊の色が見えない。始終艶福の絶えない事、小野君のやうなのも珍らしいが、就中原稿を書き上げる筆の速さは驚嘆に値する。彼の自白に依ればマキシマム一日百六十枚に達するさうである。新聞記者としても、随分速い方であらう。

以上でざつと、私が知れる限りの小野君の特長を非常に粗末に概括し得たつもりである。斯くの如く概括して見たところでは、小野君の前途はなか／＼有望であると考へられる。たゞ小野君のやうな境遇を持ち、小野君のやうな方面から出発して、社会に頭角を著はさうとする者には、動ともすると自己の世俗的経験を恃み、常識の価値を過大視し、浅薄な才弁を弄ぶ人間が多い。それでも安価なる成功は得られない事もなからうが、成る可く小野君はさう云ふ人間にならない事を望む。

序文にかへて斯くの通り

大正三年六月　　谷崎潤一郎

＊　＊　＊

二、昭和二年六月十三日付け　石井漠宛谷崎潤一郎書簡

これは、石井漠舞踊研究所文藝部編「漠のパンフレット」1輯（昭和二年七月）に、『手紙』と題して掲載されたものである。

最初に、舞踊家・石井漠と谷崎の関係を簡単に概観して置く。谷崎は、大正六、七年頃、石井漠と、漠の夫人・八重子の妹・小浪が、浅草オペラに出ていた時代に知り合い（石井漠『私の舞踊生活』）、小浪のファンになっていた（『西湖の月』に出る女優のK子は、恐らく小浪である）。もっとも、沢田卓爾によれば、谷崎ははにかみ屋なので、楽屋へ行っても、小浪の顔を見てにやにや笑って帰るだけで、誘い出して食事をする所までも行かなかったと言う（対談「荷風・潤一郎・春夫」昭和四十年十月「群像」）。また、谷崎がせい子との浮気をカモフラージュするために、小浪を使ったということも、伝えられている（佐藤春夫『この三つのもの』）。

漠と小浪は、大正十一年十二月にヨーロッパへ旅立つが、谷崎は、その後援会の発起人にも名を連ねた（山野辺貴美子『をどるばか　人間石井漠』）。

また、大正十三年春、漠の留守宅を守っていた妻の八重子が、関東大震災で焼け出されて困っている事を知った谷崎は、東亜キネマに女優として入社できるよう取り計らった。谷崎は撮影を見物に来て、撮影が終わると、当時東亜キネマに居た岡田時彦や八重子を神戸の三宮へ伴い、中華料理などを御馳走し、八重子の演技について助言したりした、と言う（石井欽『舞踊詩人石井漠』未来社）。

石井漠と小浪は、ヨーロッパで大成功を収めて、大正十四年四月に帰国する。そして、大阪の中之島公会堂で行なった彼等の公演を谷崎は早速見に行き、『西洋と日本の舞踊』と題した批評を十一月二十三日の「大阪朝日新聞」に発表した。その中で谷崎は、当時、評判の高かったデニショーン一座の舞踊公演を《寄席芸にすぎない》と一蹴し、石井漠・小浪の舞踊には《深みのある象徴的な表現》があり、《これこそ日本人の独創に

なる真に新しい舞踊だ》と絶賛している。また、『饒舌録』でも、菊五郎と並べて石井漠に言及し、《芸術三昧の境に飛遊してゐる感じが》あると称えている。

石井漠は、たまたま友人から『西洋と日本の舞踊』の載った「大阪朝日新聞」を手渡されて読み、《少しきまりの悪い気持》がしたと同時に、《この舞踊に対する見方が、西欧の舞踊批評家と一脈相通じているところがあるので谷崎氏の卓見に驚いた》と回想している（石井漠『私の舞踊生活』）。

今回紹介する手紙にあるように、石井漠が谷崎を会に招待したり、講演を依頼したりしたのも、谷崎が公演を丁重に謝絶しつつ、《夫人、小浪嬢へよろしく》と書き添えた（そして、恐らくこの手紙の「漠のパンフレット」への掲載を許可した）のも、右のような経緯を踏まえてのことなのである。

なお、この書簡には、淡路島からの帰宅が告げられているが、これは、『蓼喰ふ蟲』の淡路島の部分の元になった旅である。昭和二年《六月十六日夜》付け浜本浩宛書簡に、《淡路之人形村へ参りそれより奈良へ行つて昨夜帰宅しました》とあるのと併せて考えると、十三日に石井漠宛の手紙を出してすぐに奈良へ出掛け、十五日夜には帰って来た事になる。

以下は、憶測に過ぎないが、『現代口語文の欠点について』（昭和四年十一月）に、《二三年前》、レニングラード東洋語専門学校教授ニコライ・コンラド夫妻が来日した際、大阪外国語学校ロシア語教師のニコライ・ネフスキとオレスト・ド・プレトネルと谷崎が奈良ホテルで会合した事がある、と出ている。この短い奈良行きの目的は、もしかしたらこれだったかも知れないのである。

＊　＊　＊

拝復

ちよつと淡路の方へ旅行してゐたので御返事がおくれました。先日御来阪のせつは生憎雑誌の原稿の方が忙はしかつたので参会いたしかね、甚だ残念に存じました。

しかしいつも御元気にてます〳〵新方面を御開拓の御様子遙かによろこび申して居ります。

さて御申越しの件ですが、小生は今日まで公会の席にて講演いたしたる事皆て無之、いかなる人に頼まれても拒絶いたして居りますので、折角ながら御断りいたさねばなりません。特にあなたの方へ出ると、他の方面へ不義理となり、今後謝絶する口実がなくなりますから。事程左様に小生は演説がきらひなの

であります。

右事情不悪御酌み取りの程を願ひます。

先は御返事まで、末筆ながら夫人、小浪嬢へよろしく。

六月十三日　　谷崎潤一郎

石井漠様　侍史

＊　＊　＊

三、大正四年（推定）六月二十四日付け北原白秋宛谷崎潤一郎書簡

これは、北原東代（はるよ）著『立ちあがる白秋』（燈影舎）の1「白秋探索」「白秋と谷崎潤一郎」の章で、紹介された三つの谷崎全集未収録書簡の一つである（他の二つについては、同書を御覧頂きたい）が、その紹介の仕方に問題があると思われるので、敢えてここで取り上げる。

先に、『立ちあがる白秋』に紹介されたこの書簡の全文を引用する。

＊　＊　＊

唯今御令弟の御便に接し、恐縮に存じます。実は今日例の大金の惜春会の方の出席を断つて御約束の原稿を書き上げて了ふ積りのところ、今朝になり同会幹事の久保田万太郎氏より再応の書信にて出席を勧め来り、且つは足下に於いても大概に御出席あるべき由報し来られし為め、押し返して断るのも何となく義理わるくどうしやうかと考へて居たところでした。御令弟のお話によれば、一日二日おくれても差支なしとの事、小生も今度こそは是非書き上げる了見故、明後日までお待ち願ひ度く、毎々勝手ながら折入てお頼み申し上げます。出来上り次第、速達を以て御郵送いたします。

六月廿四日　　谷崎潤一郎

白秋様

＊　＊　＊

私はこの書簡の実物を見ていないのだが、北原東代氏によれば、この書簡は、《茶色の粗悪な紙の封筒》に入っていて、《大正一五年七月九日》の《消印》がある。《封筒裏の字はほ

とんど消えており判読できない》（つまり、中身はともかく、この封筒の差出人が谷崎潤一郎かどうかは判らない）が、《封筒表の宛名書きの字》は《谷崎の筆跡と》東代氏は推定された。そして、この《六月廿四日》付けの手紙が七月九日に出された理由として、谷崎は、大正十五年に創刊されることになった「近代風景」創刊号に寄稿を約束したのではないかと推定し（ただし、根拠はない）、それが締切りに間に合わず、六月二十四日、上京中にこの手紙を書いたが、その後で、締切りを延ばすという連絡を受けたのではないか、そして、関西に戻ってから、折角書いた手紙だからと、七月九日に伊丹で投函したのではないかと、消印の一部に「丹」の字が読み取れることを理由に、推測しておられるのである。

しかし、武庫郡本山村北畑に住んでいた谷崎が、なぜ伊丹で投函したのか、不審である。また、《明後日までお待ち願ひ度く》という《六月廿四日》付けの手紙に、一言の説明も書き加えず、二週間も経った七月九日に投函するほど谷崎が無神経だったとは、私には思えない。

また、上京中の宿泊先をどうして知ったのか、久保田万太郎が当日の朝に手紙を送ったというのも、やや不自然な感じがする。

しかし、そうした枝葉末節の疑問はさて置くとして、そもそもこの手紙（封筒ではなく中身の方）は、本当に大正十五年のものであろうか？　私がそれを疑う最大の理由は、「三田文学」大正四年七月号「消息」欄に、「六月二十四日に惜春会が浅草の大金で開かれ、谷崎潤一郎・泉鏡花・中沢臨川・正宗白鳥・阿部次郎・小山内薫・久保田万太郎・木下杢太郎・長田秀雄らが集まった」という記事があり、それが、この手紙の中に出て来る《大金の惜春会》のことである可能性が高いと思うからである。

谷崎潤一郎・正宗白鳥・武林無想庵による座談会「青春回顧」（「小説界」昭和二十四年八月）によれば、《惜春会》は、「小山内薫が幹事で、二、三度あった」ということで、そう長続きしたとは考えにくいので、大正十五年の《六月廿四日》に、《惜春会》が大金で再度開かれたという可能性は、極めて低いと言わざるを得ない（ついでながら、この座談会によれば、「谷崎は、正宗白鳥とはこの時が初対面だった。武林無想庵も来た。」とのことである。また、後藤末雄の『鴉』（「新小説」大正五年六月）には、後藤末雄も惜春會に参加したこと、谷崎（作中では松崎）に会うのは二年ぶりだったこと、谷崎は旅から旅へと放浪して、久しく行方をくらましていたことが、書か

れている)。

私の経験では、古い書簡の場合、封筒と中身が入れ違っていることは、まれとは言え、案外あることなのである。この場合も、大正十五年七月九日付けの別の白秋宛書簡が入っていた封筒に、大正四年六月二十四日付けの谷崎の書簡が間違って入れられていたに過ぎないであろう。

そのように考えれば、右に挙げた数々の疑問、なかんずく六月二十四日に書いたものを七月九日に投函したという不自然が解消され、東代氏が考案されたような無理な説明も不用になる。

谷崎がこの手紙の中で述べている《御約束の原稿》も、「ARS」の『華魁』ということで、すっきり理解できる。『華魁』は大正四年五月号に掲載された後、六月号の時には、千代子との結婚を理由に次号に延期とされ(「ARS」「編集手記」)、さらに七月号の時にも、間に合わなかったことが、「ARS」「編集手記」に出ているからである。

東代氏は、「白秋と谷崎潤一郎」で、この書簡が大正十五年に出されたことを決定的な証拠として、谷崎が『白秋氏と私』で、章子の問題が《原因で、遂に白秋氏の怒りを買ひ、その後長く相会ふことが出来ないやうになつた》と述べているのは虚構だとし、谷崎が「近代風景」創刊号への寄稿の約束を破ったことが真の原因であろうとされているのだが、残念ながら、この書簡の、少なくとも中身は、年代から言って証拠とはなりえない。

また、この谷崎書簡が入っていた《大正一五年七月九日》の《消印》のある封筒も、封筒の裏の差出人名が消えていて、消印の「丹」の字の謎も解決できない以上、上書きの筆跡の類似だけで谷崎のものと決めることは出来ない。従って、大正十五年に谷崎が白秋に手紙を出した可能性は、現段階では絶対無いとも言えないが、事実出したと決めることも出来ないのである。

また、谷崎が「近代風景」に寄稿すると約束したという東代氏の仮説も、それを裏付けるデータが、谷崎側にも白秋側にも見付からない以上、約束しながら、約束を白秋に対して失礼な仕方で破り、絶交を招いた、と決め付けることは出来ない。

ちなみに、白秋の雑誌に谷崎が寄稿したのは、今日知られる限りでは、『華魁』の他には、明治四十四年十一月「朱欒(ザンボウ)」の短歌『そぞろごと』と、白秋を追悼して『白秋氏と私』を「多磨」昭和十八年六月号に寄稿した二例があるのみである。「近代風景」に寄稿を求められ、約束した可能性は、ゼロとは言わないが、極く僅かだし、谷崎の人柄から言って、絶交の原因になるほど失礼なすっぽかし方をするとは考えにくい。多分、東

代氏は、谷崎の人柄を、実際より遙かに悪く想像されているのであろう。

白秋との絶交に関しては、松子夫人が瀬戸内寂聴との対談「愛と芸術の軌跡」（『つれなかりせばなかなかに』中央公論社）で、「谷崎は後々まで「夫婦の仲になんか入るもんじゃない、もうこりごりした、えらい目にあった」と言っていた」と、『白秋氏と私』を裏書きする証言をされている。

ただし、章子の事件後、白秋夫人となった菊子夫人から東代氏が聞かれた「谷崎が小田原の木菟の家に二三度遊びに来た」という話は、確かに興味深いし、信じるに足ると私も思っている。また、東代氏も指摘されているように、小田原事件の際、そして関東大震災よりは前に、白秋が谷崎・佐藤両人に宛てた長文の手紙を送ったという『佐藤春夫に与へて過去半生を語る書』の記述もある。従って、大正九年五月に始まった章子の事件で、すぐに二人が絶交に至ったのでないことは、明らかである。

例えば章子は、大正九年五月三日に出奔し、同月二十五日に協議離婚を届け出た（原田種夫『さすらいの歌』所収・江口章子の戸籍抄本）が、丁度同じ頃に、上山草人の娘の袖子が死亡し、潤一郎・白秋・佐藤春夫が、葬儀など一切を処理した（上山草人「難い哉在米の活動俳優　妹珊瑚への公開状」大正九年十月「中央公論」、また同年五月二十九日付け春夫宛潤一郎書簡に、袖子の葬式代のことが出ている）。

同年十月二十二日には、佐藤春夫が、谷崎夫人千代子と二人で白秋を訪ねている（佐藤春夫の『この三つのもの』、詩「感傷風景」、中河与一の『探美の夜』第四章）。谷崎との仲が険悪だったら、少なくとも千代子は、白秋を訪ねることを避けたであろう。

また、岡田時彦の私小説『時彦恋懺悔』（昭和四年『現代ユウモア全集⑱漫談レヴィウ』所収）は、内容の年代的正確さは必ずしも保証は出来ないけれども、少なくとも岡田時彦が谷崎を訪ね、大正活映に入ったのは、大正九年七月頃であるはずなのに、作中「お末と其の周囲」の章に、同じ土地に住んでいた北原白秋（作中では北野白夢）が、よく一升徳利を下げて谷崎（作中では神崎十一郎）を訪れて来た、と書かれている。これは、恐らく事実に基づく記述であろう。

そこで、以下、白秋との絶交に至る経緯を私なりに推量して見よう。

章子は、出奔後、一時期谷崎宅に身を寄せた（佐藤春夫『この三つのもの』など。この時に章子がせい子と潤一郎との仲を

千代子にばらした事が、小田原事件の発端になったと言われている）。しかし、右に挙げた様な理由から、その事で直ちに白秋との仲が険悪化することはなかったと私は考える。

章子は、五月二十五日に協議離婚を届け出た後、一旦、郷里・別府に帰り（「読売新聞」六月十日、および六月十九日付けの中田信子「離婚した白秋氏夫人へ」大正九年八月「婦人公論」）、その後、京都の寺に移った（同年十一月十七日付け春夫宛潤一郎書簡など）。谷崎は、折に触れて章子の相談に乗っていたようで、例えば、大正十年四月五日付け章子宛潤一郎書簡（一九九一年九月十九日「毎日新聞」夕刊）が、その証拠となる。

私の想像では、『佐藤春夫に与へて過去半生を語る書』に言う白秋の長文の手紙は、小田原事件が始まる大正九年十一月以降、大正十年の六月以前に出されたものと思う。白秋の方に多少のわだかまりがあったとしても、大正十年四月に菊子夫人と再婚してからは、それも消えたであろう。

ところが、大正十年六月七日か八日頃、章子が突然、小田原の谷崎宅にやって来て、暫く滞在した（同年六月十日付けと十六日付け春夫宛潤一郎書簡、また、西本秋夫『北原白秋の研究』・江口章子「詩人の妻より工場生活へ」大正十二年八月「女性改造」）。この時、章子が、既に菊子と結婚していた白秋との接触を望むようなことがあり、谷崎が章子の希望を白秋に伝えるか何かしたことが、《白秋の怒りを買》（『白秋氏と私』）ったのではないだろうか？　常に章子に同情的な立場を取って来た谷崎であるから、そうした事も充分考えられる。そして、その後、同年八月末に谷崎が横浜に引っ越した事や、その二年後の関東大震災以降は、専ら関西に住むようになって、自然、疎遠になったことも加わって、絶交同然の形になってしまったのではないだろうか。

先に引いた瀬戸内寂聴との対談「愛と芸術の軌跡」で、松子夫人は、「江口章子は困ると谷崎の所へ来るので、谷崎もしまいに「そんな精神じゃだめ！」ってすごく怒って追い出した。後々まで怒っていた」と証言している。谷崎の怒りの幾分かは、章子のせいで、白秋に絶交されてしまった事によるのではないだろうか。

右は勿論、憶測の域を出ないが、白秋との絶交の時期は、小田原時代の最末期であろうと、私は信じるのである。

【付記】

話は変わるが、谷崎の書簡に関する誤りを、ついでにもう一つ指摘して置く。平成十三年に刊行された『谷崎潤一郎＝渡辺

千萬子往復書簡』（中央公論新社）に昭和37年10月2日付けとして配列されている千萬子の潤一郎宛書簡がそれである。

私は書簡の実物を見ていないが、この書簡には、《昨日高折の母からきゝましたが吉井先生がお悪いやうです。》として、吉井勇が睡眠薬中毒で京大病院に入院中という話が出て来る。しかし、吉井は昭和三十五年十一月十九日に亡くなっているから、この手紙は、それ以前のものでなければおかしい。この書簡には、谷崎の《異常感が相変らず》で、《もうかれこれ一年にもなります御闘病の生活ですから》、とあるので、昭和三十三年十一月二十八日に右手に麻痺が起こってから約一年後の、昭和34年10月2日付けのものとするのが妥当であろう。

なお、昭和三十四年十一月二十七、八日に、京舞東京公演があった際、その前祝の会の席上で、吉井勇と川端康成が眠り薬について語り合ったことが、川端康成の『自慢十話』「大女優の異常」に出ている。昭和三十四年に吉井が睡眠薬中毒になったことの裏付けとして、挙げて置く。

四、谷崎の「求婚条件・七ケ条」記事

この記事は、野村尚吾『伝記谷崎潤一郎』一二「高野山の蜜月」（六興出版）・高木治江『谷崎家の思い出』十四章（構想社）・大谷晃一『仮面の谷崎潤一郎』第四帖「この二つのもの」（創元社）に紹介されているが、いずれも完全な翻刻ではないので、ここに、あらためて忠実に翻刻して置く。

この記事は、「大阪毎日新聞」昭和五年十二月十九日（金曜日）朝刊（七）面の右上隅に四段組で掲載されたものである。

なお、原文は旧漢字・パラルビであるが、翻刻に当たって、新漢字に改め、ルビは省いた。

＊　＊　＊

谷崎潤一郎氏が
ひそかに見合
『関西の婦人であること』など
求婚条件・七ケ条

1、関西の婦人であること、たゞし純京都風の婦人は好まぬ
2、日本髪も似合ふ人であること
3、なるべくは素人であること
4、廿五歳以下でなるべく初婚であること（丙午も可）
5、美人でなくとも手足の奇麗であること
6、財産地位をのぞまない人
7、おとなしく家庭的の婦人であること

▽▽**平凡な**△△　あまりにも平凡なこの結婚七ケ条は、文壇の大家谷崎潤一郎氏が目下探しもとめてゐる良妻への希望条件である、去る八月、十余年連れ添うた千代子夫人と離別して愛欲葛藤の清算をして以来、世のあらゆる批判を真正面からうけ流してゐること四ケ月、モダン女性の積極的な求婚を尻目に悠悠独自生活を楽しんでゐた氏は数日前ひそかに上京して某知人某氏の紹介で見合ひをしたといふ、相手の女性といふのは今年

▽▽**廿六歳**△△　相当な家庭の婦人、三日ばかり交際したのだが、惜しくも第一項と第四項に触れて不成立、阪急沿線岡本に氏を訪ふと「何処で聞いてきた？」とイガグリ頭をなでながら上機嫌で語る

それは事実だ、だが成立しなかったのだからその婦人に対

しても気の毒で名前はいへない、その婦人も紹介者も文壇には全然関係のない人だ、だから今度上京しても誰も知らないし誰にも会はなかつたのだ、何故その婦人がいけないかつて？

▽▽**あまり**△△　に関東過ぎるからさ、僕は自分が関東生れだが長く関西にゐるためか関西風の女性が好きだ、将来も関西で暮すつもりだしネ僕ののぞむ条件にあてはまる人があれば、いつでも結婚するよ

と、七ヶ条なるものを示す

まア気ながに探すんだ、その中に何とかならう、他に二、三口をかけてゐるからね、それよりか、君、この家を売りたいんだがネ

岡本の梅林を眼下に、大阪湾を一眸にをさめる山腹の四百六十坪、谷崎氏が購入した時は土地だけで四万二千円、建物を加へて六万円以上もかけてあるのだが、同じ場所に住んでゐると

▽▽**気分が**△△　転換しないとある

これが売れさへすれば住吉観音林の上の方にでも移りたいのだがネ……

＊　＊　＊

幾つか注解を付して置こう。

先ず、この記事に言う《某知人某氏の紹介で見合ひをしたといふ、相手の女性》は、谷崎は《文壇には全然関係のない人だ》と煙幕を張っているけれども、嶋岡晨『伝記萩原朔太郎』（下）（春秋社）によれば、萩原朔太郎の妹・愛子（明治三十七

年生まれで、昭和五年には二十七歳。のち、佐藤惣之助と結婚）であった。二人は一週間ほど、毎日、芝居見物や食事に出かけたが、結局、残念ながら、元の白紙に戻すことになったと言う。朔太郎のもう一人の妹・幸子によれば、この時、潤一郎は、「アンドンのかげで一日じゅうお針をしているような女が好きだ」と朔太郎に言ったという（「萩原朔太郎研究会会報」16号「津久井幸子さん、萩原愛子さんにものをきく」）。

次に、岡本梅ノ谷の土地が、《四百六十坪、谷崎氏が購入した時は土地だけで四万二千円、建物を加へて六万円以上》とあるのは、貴重な資料である。昭和六年十二月十一日大阪毎日新聞社発行の号外（文箭孝子氏所蔵）の裏面記事に、「売られた谷崎氏邸　二万六千円で話が纏る　滞納の税金もすつかり片づく」と出ているように、この土地・建物は、結局、随分な安値でしか売れず、以後、数年間、谷崎は貧乏生活を強いられた。

《これが売れさへすれば住吉観音林の上の方にでも移りたいのだがネ》と言っていることも、興味深い。観音林（現・東灘区住吉山手）は、野村邸など資産家の豪邸が建ち並ぶ住吉川西岸地域で、谷崎は、昭和十一年に、同じ住吉川の下流に当たる、やはり高級住宅地・反高林（現・東灘区住吉東町）に居を構え、数年越しの夢を叶える訳である。

《求婚条件・七ケ条》については、私は谷崎の本音と受け取っている。

1．《純京都風の婦人は好まぬ》は、大阪的な、開けっぴろげで明朗快活な女性を望んだからであろう。

2．《日本髪も似合ふ人》は、「日本髪が似合ふ人」ではない所に注意したい。つまり、古典趣味一辺倒ではなく、近代的（西洋的）な面と両面を求める意図があったと取りたい。

最終的に谷崎が選んだ丁未子は、「ジャネット・ゲイナー」という綽名があった（「婦人公論」昭和六年六月「谷崎潤一郎氏新家庭訪問記」）程、ハイカラな美人だったし、谷崎が、丁未子に対して、以前、映画や新聞・雑誌記者の仕事を紹介した（高木治江『谷崎家の思い出』）のも、丁未子をそういう仕事に向いたハイカラ女性と見ていたからであろう。この直前の昭和五年十一月二十九日付け古川丁未子宛書簡（「大阪春秋」平成十四年六月号に三島佑一氏が紹介された）でも、《たまにはこちらへ遊びに来ませんか（中略）宝塚のダンスホールへ是非御案内します》と書き送っている。

結婚した後も谷崎は、丁未子に対しては、一年間に限ってだが断髪を許し、週に一度はダンスの稽古に行くことを認めていたのである（前掲「谷崎潤一郎氏新家庭訪問記」）。

谷崎は、千代子との離婚を前提とした『蓼喰ふ蟲』（その二）で、《夫婦別れをしようと云ふのは、自分も美佐子ももう一度自由に復つて、青春を生きようためではないのか》と書いているし、丁未子に求婚して一週間後の昭和六年一月二十日付け丁未子宛書簡（「読売新聞」平成三・八・二十二夕刊など）でも、《今一度、私に青春の活力と情熱を燃え上らして貰いたいのです。》と書いている。《青春》・若さを取り戻そうとする谷崎は、近代的・西洋的なものに対しても、決して拒否的ではなかった筈なのである。

3．《素人》好みは、谷崎のもともとの志向である。

4．《廿五歳以下》《初婚》は、数え年二十四歳だった丁未子が含まれるようにしたと考えて良い。二十八歳だった松子は、まだ根津家が健在であったこの時点では、問題外と考えていたのであろう。

5．顔より《手足の奇麗であること》を求めるのは、さすがにフェティシストである。

6．は当然として、7．《おとなしく家庭的の婦人であること》を求めたのは、崇拝対象としての松子とは、はっきり区別するつもりだったと私は考えている。ちょうど、この直前まで執筆していた『吉野葛』の津村が、女中タイプのお和佐を、心の恋人である「母」の粗悪な似姿として、自分好みに育てて行ったように、谷崎は、可塑性に富む若い女性を引き取って、自分の理想のタイプに改造するつもりだったのであろう。

五、対談「谷崎潤一郎映画を語る」（古川緑波記）

これは、昭和十三年三月一日発行「映画グラフ」第4号（「キネマ旬報」同人編集）に掲載されたものである。

この対談がなされたのは、昭和二十二年十一月二十六日のことらしい。『古川ロッパ昭和日記』（晶文社）から、当日と翌日の記事を簡略化して紹介すると、「十一月二十六日。午後四時近く、車で下加茂へ行き、井上金太郎・山本・玉木・安藤キャメラ子と岡崎の動物園先の谷崎邸へ。一寸大磯あたりの別荘風な家、「潺湲亭」と書いてある。先生は近くのお寺で仕事中（細江注・南禅寺の塔頭・真乗院か？）。やがて帰って来られ、「この頃は座談会ばっかりでね」僕「この間天皇陛下との座談会拝見しました」。岡崎の有楽荘広間で対談、速記。近頃の映画をどちらも見ていないので話はずまなくて困る。」「十一月二十七日。対談まとめ、脱稿。山本緑葉に渡す。」となる。

対談の翻刻はしないで置く。

谷崎の発言のうちで、私が興味を抱いたのは、ルイ・ジュウベをひいき役者と言い、「日本の歌舞伎役者ぐらいのものを持っている」と評していること、『猫と庄造と二人のをんな』『或る少年の怯れ』『細雪』『痴人の愛』の映画化の申し入れが、当時あったこと、「ロッパのは以前、大分見た」と言っていること、「女優の顔立ちではハイカラなのがいい。死んだ桑野通子なんかよかった。田中絹代は、芸はうまい。山田五十鈴も芸はうまい。エロティックな感じでは水戸光子。男優では斎藤達雄が好き」と言っていること、などである。